# 30amG-111

## 実務実習における服薬指導熟達測定のための評価指標の検討

○藤崎　玲子[1], 喜多代　早紀[1], 後藤　満美[1], 朝日　みのり[1], 高島　洋子[1],
前田　正輝[1], 石塚　英夫[1]([1]望星薬局)

【目的】実務実習において指導薬剤師は、各実習項目（ＬＳ）についてモデルコアカリキュラムに明記された知識、技能、態度を評価しなくてはならない。知識、技能の評価には様々確立した評価方法があるが、態度については学生の行動変容を指導薬剤師の主観で捉えることでしか評価し得ないのが現状である。
そこで、特に態度の習得が重要である服薬指導において、熟達度の変化を科学的に測定し、評価の基準を導き出すことを目的として本研究を実施した。
【方法】平成２４年度第Ｉ期に当薬局で受入れた実習生を対象に調査を実施した。
１）実習生の服薬指導実習（初期・後期）及び薬剤師の服薬指導会話を録音
２）サンプリングした服薬指導会話をテキストデータにし、状況言語（誘導言語、指導言語、共感言語、媒介言語）ごとに分類
３）状況言語の発話回数、構成比を実習初期と後期、薬剤師と実習生とで比較
４）評価基準となりうる要素の抽出
【結果および考察】薬剤師の服薬指導は、各状況言語がバランスよく発話されているが、実習初期では指導言語と共感言語が 90％を占め、共感言語の種類が限定的であった。しかし実習後期になると、状況言語の構成比が薬剤師に近似し、共感言語の種類も増えた。以上の結果より、実習生の発話する状況言語の構成比が実習初期と後期とで変化し、薬剤師に近似することが測定できれば、服薬指導の熟達が科学的に評価可能であることが示唆された。
　本研究はテキストデータのみで評価したため、コミュニケーションにおいて重要とされる非言語・準言語コミュニケーションを評価できていない。今後はコミュニケーション全体を評価できる方法を検討していきたい。